

<別紙1>

第三者評価結果報告書

①第三者評価機関名

公益社団法人神奈川県介護福祉士会

②施設・事業所情報

名称：川崎市津田山保育園	種別：保育所	
代表者氏名：森岡 真由美	定員（利用人数）： 120名	
所在地：川崎市高津区下作延5-1-10		
TEL：044-888-5291	ホームページ：https://www.city.kawasaki.jp	
【施設・事業所の概要】		
開設年月日：1973年7月1日		
経営法人・設置主体（法人名等）：川崎市		
職員数	正規職員： 21名 会計年度任用職員： 16名	
専門職員	（専門職の名称）	
	保育士 19名	栄養士 1名
	看護師 1名	用務員 1名
施設・設備 の概要	（居室数）	（設備等）
	保育室10	多目的室

③理念・基本方針

<p><保育理念></p> <ul style="list-style-type: none">・基本的人権を尊重し、子どもの健やかな成長発達を保障する。・保護者との信頼関係を深め、子どもの最善の利益と福祉の増進を図る。・地域の子育て支援施設としての役割を果たす。 <p><園目標></p> <ul style="list-style-type: none">・心身ともに健康な子ども・感性豊かな子ども・友達と遊べる子ども <p><園の特色></p> <ul style="list-style-type: none">・生活や遊びの中、実体験を通した子ども達の発見・感動・共感を大切にしています。・異年齢の関わりを通して、憧れや思いやりの気持ちを育てます。・可動遊具でたくさん遊びます。・地域のお子さん達に園庭や室内を開放し園児と一緒に遊んでいただいています。
--

④施設・事業所の特徴的な取組

<p>○全体的な計画の中の目標「主体的にやってみようを大切に」を目指して、保育を行っている。おもちゃは既成のものではなく、素材そのものを準備し、子どもたちがどう使って遊ぶか考えられるよう働きかけている。園庭では、古タイヤを引いたり、乗ったり、飛び越えたり、様々な工夫をして楽しみ、樽の中に入り、隠れたり、転がしたりして遊び、L字パーツで2階建の家を作ったり、電車にしたりと、子どもたちは自由に創造性を膨らませて楽しんでいる。</p> <p>○保育士と栄養士、看護師が連携し、子どもたちの食育と健康作りに取り組んでいる。「食育年間計画」を立て、栄養士による食事のマナーや、魚の話、朝食の大切さ、健</p>

康列車による3色（からだを作る栄養素、力持ちになる栄養素、からだの調子を整える栄養素）について、栄養指導を行い、食事の大切さを楽しみながら学んでいる。また、「健康管理計画」を作成し、健康集会では、虫歯予防、手の洗い方の指導、夏場は水分補給の大切さ、冬は風邪予防、咳の仕方エチケットなどの指導を行っている。

⑤第三者評価の受審状況

評価実施期間	2020年10月7日（契約日）～ 2021年2月16日（評価結果確定日）
受審回数（前回の受審時期）	3回（2015年度）

⑥総評

◇事業所の特色や努力、工夫していること、事業所が課題と考えていること等

○昭和48年開設の歴史ある公立保育園で、120名の子どもたちの保育にあたっている。1階には、3～5歳の幼児クラスの保育室があり、2階には0～2歳児の乳児クラスの保育室がある。園庭は広く、たくさんの遊具があり、子どもたちが、のびのびと活動している。園の周りには自然豊かな公園や霊園があり、子どもたちは、ドングリや葉っぱを拾ってきて楽しんでいる。

○地域に向け、子育て相談を主に行いながら、園庭開放や室内開放、園文庫の絵本の貸し出し、体験保育、離乳食講座や健康講座などの専門講座、イベント開催などを計画的に行い、園の機能を地域に開放している。年末の保育にも取り組んでいる。

○肯定的言葉を使うよう心がけ、子どもが安心感を持てるよう対応している。ありのままの子ども姿を、受け止めるようにしている。指示されてするのではなく、安心して自分で決め、自分でできるような声かけをしている。

○0歳児の保育では、離乳食は、入園時や適宜、担当保育士や栄養士が保護者と面接して進めている。家庭で食べている食材を確認しながら、園の離乳食として提供している。個別ノートや口頭で、保護者と細かく連携を取り、保護者の不安を解消するようにしている。離乳食後のミルクは、保育士が一人ひとり抱っこして飲ませ、安心感を持てるよう関わっている。また、子どもの姿や表情から応答的に関わり、子どもとの関係性を深めている。午睡の際は、SIDS（乳幼児突然死症候群）防止のため仰向きに寝かせ、5分置きに呼吸をチェックして、記録に残している。

○1歳以上3歳児未満の保育では、子どもの自己主張を穏やかに受け止め、子どもの気持ちを尊重した温かい雰囲気を作っている。思いを言葉にできない時は、保育士がスキンシップを取りながら、「これしたかったのね」など代弁して伝えたり、しぐさや表情から、「今度これしてみようか」など読み取り、丁寧な関わりを行っている。

○3歳以上児の保育では、子どもの年齢や発達、興味、関心に合わせ、子どもたちが主体的に遊べるよう環境作りを行っている。3歳児は、初期は人数を半数に分け、小グループで生活できるようにして、一人ひとりの細かい部分まで、目が届くようにしている。4歳児は個を大切にしながら、集団の生活の楽しさを感じられるようにしている。5歳になると、一人ひとりの個性や思いを、お互いが認められるような関わりをしている。行事などを通して、その子どもの良さを引き出せるよう、その子どもならではの取り組みを考えている。

○「食育年間計画」を立て、野菜の苗を植え、育て、収穫をした。例年、厨房で調理してもらい、子どもたちは楽しみながら、育てた野菜を摂っているが、今年度はコロナ対策のため、自宅に持ち帰った。大根やトマト、トウモロコシ、オクラなど、苦手なものでも、自分たちで育てたものは食べられるようになった子どももいる。また、雛祭りや子どもの日など、行事にちなんだ見た目もきれいな行事食を提供し、子どもたちが楽しく食に向えるよう工夫している。食事中は保育士はあまり動かず、落ち着いた

て食べられるよう、雰囲気作りを行っている。

○人材の育成として、各クラス内でOJT（実際の仕事を通じた教育方法）チームを作り、「OJTノート」を活用して、クラス運営について同じ方向性や対応がとれるよう、話し合いを進めている。また、園内研修については、「子どもの主体性」と「身体づくり」の2グループを作り、保育士は必ずどちらかのグループに入り、保育の見直しや課題に向けた実践、振り返りを行い、保育の質の向上に努めている。

◇独自項目への取り組み

○事業所におけるサービスの質の向上のためのシステムを確認する「発展的評価項目」に取り組んでいる。「子どもが自分自身で事故予防を考えられるために～大きな怪我をしにくい身体づくり～」をテーマとして、取り組みの過程をPDCA（計画、実践、評価、改訂）に分け、実践を振り返っている。子どもと危険について共に考える機会をもち、共有したことを子どもの育ちにに応じて更新していくこと、年齢ごとのおさえるべき育ちを確認しながらも、子どもの特性に応じた働きかけについて保育者間で意見交換し保育内容の向上に努めることとして、今後も継続した取り組みとしている。

○内容評価項目について、事業所が具体的に次への取り組みを検討する「課題抽出項目」では、＜A3：一人ひとりの子どもを受容し、子どもの状態に応じた保育を行っている＞について、あらためて現状を評価、分析している、項目については十分に対応できているが、現状の取り組みを継続しつつ、さらに具体的な取り組みを検討、追加している。

⑦第三者評価結果に対する施設・事業所のコメント

第三者評価を受審することで、再度、自園のことを見直すことができ、また、職員が共通認識を持つことができました。取り組む中で、良い面や課題が見つかり、今後を活かしていきたいと思えます。

⑧第三者評価結果

別紙2のとおり